

最古の屋敷割絵図にみる江戸前期の倉敷

畑 和良（倉敷市総務課歴史資料整備室）

はじめに

江戸時代の倉敷村中心部＝現在の美観地区とほぼ一致。

- 1) 鶴形山南麓から倉敷川の河畔にかけて広がる古い街並みが有名だが、いつごろこの景観の形成がはじまったのか従来の研究では不明。
- 2) 江戸時代の倉敷村を描いた絵図…たくさんある。特に倉敷村庄屋を長く務めた小野家の文書（倉敷市歴史資料整備室所蔵）に色々な年代・種類の絵図が残されている。
- 3) これまで知られていた倉敷村市街部の様子を街路や個別の屋敷区画・住民名まで克明に描いた絵図で古いもの

年次明記の史料＝宝永7年（1710）の絵図（宝永絵図。小野家文書54-4。

『新修倉敷市史』第10巻付録。参考文献1・3）

年次推定の史料＝貞享元～2年（1684～5年）の絵図（貞享絵図。小野家文書54-3倉敷村屋敷割絵図）

昨年6月に行った資料展示会「小野家文書の世界—倉敷村の慶長から明治—」準備の際、小野家文書の絵図資料を逐一確認していくと、宝永絵図・貞享絵図と同じように街路や屋敷割・住民名を描き込んだものが他に1点（小野家文書49-1-22）あることに気付いた。宝永絵図・貞享絵図とは色々と描かれているものが違って注意を惹く。

・一目で分かるのは、現在倉敷考古館と倉敷館との間に架かっている中橋がないこと

★いつごろのどういう目的で描かれた絵図なのか？

1. 絵図の成立年代

年代は明記されていないが特定可能。

- 1) 寺院の名前が宝永4年（1707）以前の名称になっている（南ノ坊→教善寺）。
- 2) 屋敷区画に記された住民名が古く、延宝4～6年（1676～1678年）の間の人名が書かれている（表1、史料4・5）。
- 3) 延宝5年（1677）の倉敷村水夫屋敷帳（小野家文書1-3。『倉敷市史』第3冊に収録。史料1）に列挙された屋敷群の範囲・屋敷所持者名と、絵図が描く屋敷群の範囲・屋敷所持者名がほぼ一致。各屋敷地の帳面への記載順と絵図上の屋敷の並び順まで一致する（史料1・2）。

＝延宝5年（1677）段階の倉敷村中心部、「水夫屋敷」に指定されていた範囲の街路と町割りを描いた図と考えられる。＝「**倉敷村水夫屋敷古図**」と命名

★水夫屋敷（かこやしき）＝領主の移動・物資輸送・軍事行動に際し、必要な船舶および船を操舵する水夫の労働力（またはこれに代わる役銀）を提供する見返りに、租税を免除されていた人々の屋敷。

★倉敷村の絵図のうち、屋敷の区画や住民名、街路の詳細が分かるものとしては今のところ最も古い資料。岡山県内に残る城下町ではない在町の町家の屋敷割と住民名を詳細に表現した絵図としては最古のものである。

2. 絵図にみる近世前期の倉敷村中心部の特徴と町並みの成り立ち

(慶長時代の倉敷村)

倉敷村水夫屋敷古図および延宝5年水夫屋敷帳が示す町並みの範囲＝屋敷区画の軒数・各屋敷個別の面積とも慶長14年(1609)水夫屋敷帳(小野家文書1-1倉敷屋敷方御免被成分之帳。史料3)に登録された屋敷群と一致。

- 1) 慶長の帳面に登録された住民名をそのまま延宝5年の倉敷村水夫屋敷古図に書き込んでいくと、慶長時代の倉敷村が復元できる。
- 2) 水夫屋敷指定は、慶長5～9年(1600～4年)に備中国奉行を務めた小堀正次によってなされたと延宝5年水夫屋敷帳奥書にある。

★つまり、倉敷村水夫屋敷古図に描かれている範囲の家並みや街路は、関ヶ原合戦直後には既に存在していたことになる。これだけの町場が突然現れるはずはない→戦国時代後半から町場としての形成がはじまっていた可能性大(永禄8年＝1565年には倉敷町の商人が高野山に参詣したとの記録あり。参考文献9)。

(慶長期倉敷村の形成過程)

- 1) 本町通の別名は「市場」。慶長年間までに成立していた本町通を挟んで整然と形成された短冊型地割の両側町は、戦国期に街路から生まれる利潤を共有するために集住した人々によって形成された市場集落を原型に成立している可能性が高い。今も残る最大幅9mの巨大な街路も、この路上自体が交易の場であった名残では。
- 2) 倉敷川東岸エリアは「向市場」「新町」の名称。ここも基幹街路(向市場通)に沿って家並みが形成されているが、倉敷川沿いは「野地」とされ、延宝5年段階でも未開発。宝永絵図にみえる基幹街路から河畔に出る道もなし。要するに開発時期が新しく、未完成のエリア。市場の向いに出来た新しい町という意味での「向市場」「新町」。

★新町の形成状態や、本町通から倉敷川河畔へ出る細い路地「途子」(ずし)の存在から、倉敷の町場は本町通・向市場通といった基幹街路がまず成立し、河畔側へと家並みが拡張していく形成過程が見通せる。

※途子＝大通りどうしを連結する小路のこと(参考文献10)。町場の拡張と密接に関わって出現する路地と考えられている。向市場通から倉敷川東河畔に出る小路もこれ。「ひやさい」と呼ばれている路地と同一か。

(慶長期倉敷村の住民構成)

- 1) 「庄屋助右衛門」こと小野助右衛門が、本町通のど真ん中の最も標高の高い場所(参考文献14)、昭和初期まで子孫が居住した地点に、慶長14年段階で既に本宅を構えている。そこから山側の弓場町、本町通の南側、倉敷川北岸の船場まで、助右衛門の抱屋敷と戎屋小野家(新左衛門)・小野彦右衛門ら小野一族が各通りの中央を貫通するように屋敷を構えている。元和5年(1619)には組頭も務めた庄屋小野一族(参考文献4)を中心に据えるかたちで倉敷川北岸エリアの町並みが形成されている。
- 2) 小野一族と共に元和5年に倉敷村組頭を務めた油屋吉田家(参考文献4)も、慶長時点までに倉敷川河畔の船場に子孫に継承される本宅を構えていた。当主吉田孫右衛門の兄弟という宮崎屋井上新右衛門、一門の板屋井上家(加賀屋とも)・宝来屋吉田家も本町通や船場に屋敷を連ね、倉敷川北岸エリアでは小野一族に次ぐ勢力。倉敷村は近世を通じて郡村など備前国児島郡東部の港町と物流面や技術的な交流を持っていたが、吉田・井上一族はその児島郡東部の出身。郡村からは井上一族を名乗る商家

- (山川家など)や井上姓の大工が早くに倉敷村に入り込んでいた(参考文献 12・13)。
- 3) ほかに瀬尾屋藤井家・井筒屋水沢家・播磨屋原田家などが、後年まで子孫に継承された屋敷地をこの時点で確保している。「古禄」といわれるこれらの家が、文字通りの草分け的存在として慶長年間までに倉敷村中心市街部に根付いていたことが分かる。
 - 4) 新町に大きな屋敷地を持つ「下倉喜介」は、備中南部の地域有力者で慶長9～元和3年(1604～17年)に備中国奉行小堀政一(遠州)の手代を務めた人物(参考文献7)。小堀政一は向市場通の東隣(現在のアイビースクエア敷地)にかつて存在した城山に政治拠点を構えていたと考えられている。この城山から西へ延びる通路が向市場通の中央に接続しており、その交差点を囲むように下倉喜介や庄屋小野一族の屋敷が配されている。新町エリアは慶長年間に領主小堀氏と地元有力者の結びつきを契機として形成開始された可能性がある。
- ★最初に倉敷川北岸エリアの本町通を軸線とする町並みが、この地を経済・技術的交流の場とする小野一族ら地元有力者と備前国児島郡東部の有力者らによって形成され、次第に倉敷川河畔に向かって途子を伸ばし並行街路を増やすかたちで町並みが拡大。慶長5年以降に備中国奉行として赴任した小堀正次・政一父子と地元有力者が結びつき、小堀氏拠点の膝元に向市場通を軸線とする新町の町並みが開発された可能性が高い。

(延宝5年の倉敷村の景観)

倉敷村水夫屋敷古図と同じ延宝5年成立と考えられている倉敷村絵図(小野家文書168-1-1。参考文献4。絵図①)、これと同じ町並みを描いた距離書込倉敷村絵図(小野家文書49-7。絵図②)をみると倉敷川右岸の川沿い、本町通の西端観音坊前から分岐して西へ向かい地藏院に至る街路沿いにも家並みがみられる(向船場町・井上町)。

>倉敷村水夫屋敷古図は慶長以来存在した水夫屋敷指定エリアのみを描いたものであり、延宝5年ごろまでにはエリア外の開発が進んで新しい家並みが形成されていた。

>水夫屋敷指定エリア外の家並みが何時頃形成されたのか具体的に不明。寛文13年(1673)には倉敷川右岸の家並みが存在した(小野家文書161-7倉敷村舟入川幅相定覚。史料6)。慶長期に既に成立済だった可能性も含むが、延宝5年の絵図①②に描かれる家並みが全て慶長期に存在し、そこから60年以上なんらの変化も起きなかったと仮定するのは不自然。水夫屋敷エリア外の家並みは、徐々に(または何らかの節目ごとに)開発されていったと考えるのが自然。

もともと倉敷村の構成要素として存在していたものに寄り添う範囲内で町並みがまとまっている。倉敷川沿岸から逸脱せず、村の四方にあった寺社(妙見宮・観音坊・地藏院・南ノ坊)がおおむね家並みの範囲の外郭となる。

- 1) 倉敷川に架かる橋が今橋・前神橋の2つしかない。現在「中橋」と呼ばれている橋が出来るのは、天和年間(1681～4年)のことと考えられる(貞享元～2年《1684～5年》の貞享絵図に初めて「新橋」の名で登場する)。倉敷川北岸の古くからの中心街と新開地である倉敷川右岸との町としての一体性は発達途上の段階にある。
- 2) 今は暗渠になって見えない「新川」もまだ開削されていない。新川の成立時期や機能については今回触れないが、その名のとおり人工的に新規開発された水路である。
- 3) 町割りの基本形は慶長期から変わらないが、近隣の屋敷地を併合して巨大化している特定の家が目立つ。庄屋小野家・瀬尾屋藤井家・油屋吉田家・宮崎屋井上家の邸宅が顕著に拡大している。特に瀬尾屋藤井家は本宅以外の抱屋敷を市街部や町はずれ

に多く所持し、慶長以降の60年の間に急速に有力者になった様子がわかる。また、以前は市街部にみえなかった岡一族や大島屋大島家が進出し、それぞれ広い屋敷を構え、町中に分家を派生させている。17世紀後半までに町場の勢力図が変化し、一部の有力者が大邸宅と多数の屋敷地を保持する状態に。

延宝5年からすると次の段階（26年後）になる元禄16年（1703）の絵図（小野家文書168-1-2。『倉敷市史』第5冊759頁掲載）をみると、

- 1) 井上町と呼ばれていた両側町が、地蔵院を越えて倉敷新田用水まで伸びている（→阿知町）。また、阿知町の街路から分岐する支道が新たに造られ、そこにも両側町の形成が始まっている（→相生町）。
- 2) 本町通の西端、観音坊前から浜村方面（現・倉敷駅方面）へ延びていく里道沿いに、延々と両側町が形成されている（→夷町・戎町。現在の倉敷えびす通り商店街）。
- 3) 本町通の東端や倉敷川右岸の家並みの南端が延び、船倉地区にも家並みが出現。
- 4) 新川が開削され、中橋（当時の呼び名は「新橋」）も出来ている。

これまで倉敷川の沿岸地域にまとまっていた家並みが、それまでの範囲を大きく逸脱して拡大している。17世紀末に新禄や借家人など新たに村外から倉敷村に進出して土地集積や商売を行う人々の流入が増加（参考文献6）し従来の町の範囲がキャパオーバーして町場が拡大。従来の形成過程と異なり、人口を受け入れる目的で家並みがタコ足状に開発されていく段階。延宝5年倉敷村水夫屋敷古図に表現された町並みは、そうした人々が流入する直前の段階、草分け的な住民が中心になって形成した街並みの最終段階の姿。

まとめ

- ・岡山県域で慶長期（1596～1615年）の都市構造を当時の史料によって屋敷割・住民名まで明らかにできる町は他になく貴重。
- ・倉敷村＝中世から近世への移行期に成立した大名城下町でない都市の原初形態と開発・拡大の過程を見通すことができる町場という、新たな位置づけ・価値づけ。

参考文献

- 1 『新修倉敷市史』第10巻史料近世（下）（倉敷市、1997年）
- 2 永山卯三郎編『倉敷市史』第3冊（名著出版、1973年）
- 3 山本太郎「宝永七年倉敷村屋敷図」（『倉敷の歴史』第1号、1991年）
- 4 山本太郎『近世幕府領支配と地域社会構造』（清文堂、2010年）
- 5 倉地克直・山本太郎・吉原睦『絵図で歩く倉敷のまち』（吉備人出版、2011年）
- 6 内池英樹「在方町倉敷の空間構造」（『倉敷の歴史』第10号、2000年）
- 7 人見彰彦『備中国奉行小堀遠州』（山陽新聞社、1986年）
- 8 三宅正浩「近世初期備中国の所領構成」（『倉敷の歴史』第29号、2019年）
- 9 新城常三『社寺参詣の社会経済史的研究』（塙書房、1964年）
- 10 足利健亮『中近世都市の歴史地理』（地人書房、1984年）
- 11 玉井哲雄「近世都市空間の特質」（吉田伸之編『日本の近世』第9巻、中央公論社、1992年）
- 12 山川菊栄・向坂逸郎編『山川均自伝』（岩波書店、1961年）
- 13 井上賢一『阿智神社考』（私家版、1983年写。倉敷市歴史資料整備室所蔵）
- 14 『重要文化財井上家住宅主屋ほか四棟保存修理工事報告書（本文編）』（岡山県、2022年）

